

第1466回（6月12日）

生乳市場の競争性と飲用乳価の水準

鈴木宣弘

慢性的生乳過剰構造からの脱却、内外価格差是正の要請等の観点から加工原料乳保証価格の引き下げが求められつつある中で、保証価格引き下げの生乳需給への影響を定量的に検討することは重要である。その場合、保証価格低下の下で飲用乳価がどう変化するかを把握することが最大のポイントと考えられる。つまり、現状（制度下）の生乳需給システムにおける飲用乳価の決定メカニズムの把握が問題となる。拙稿（1989年）では、北海道と都府県の競争によって飲用乳価は「概ね」競争的に決まっていると、飲用乳価が加工原料乳価に対して相対的に高くなると指定団体の飲用乳販売量が増えるという統計的關係式を取り入れ、飲用乳販売量と飲用乳需要との需給一致点で飲用乳価が決まるとした。これに対しては、飲用乳価決定メカニズムの理論的把握が曖昧だという批判があった。また、1966～87年間を通じて生乳市場の競争性が一定であると考えることの問題点も指摘された。そこで、そのような批判を踏まえ、生乳市場の競争性の時系列的変化も考慮しつつ現状（制度下）の飲用乳価の決定メカニズムを説明できる生乳需給モデルを見いだすことを課題とする。

現状の飲用乳価の水準を、指定団体の生産制限を含む完全な協調による共同利潤極大化水準、生産制限はできないとした場合の売上高最大化水準、クールノー型及びシュタッケルベルク型同質寡占（複占）等の均衡水準あるいは全面的価格競争水準等と比較した結果、日本の生乳市場（飲用乳価）は指定団体の完全な協調モデルで説明できるほど独占的ではないが、輸送費に起因する格差で説明しきれないほど競争的でもないと言える。また、クールノー型及びシュタッケルベルク型同質寡占

（複占）等の寡占モデルの均衡解の中で現状に近い水準を見いだすこともできなかった。また、 K (conjectural variation, 推測的変動) の値の減少に見られるように、時系列的には競争性がやや強まる傾向にある。

このような状況で、現状（制度下）の生乳需給モデルを構築する1つの方法として、クールノー型及びシュタッケルベルク型寡占モデルのように K (推測的変動) の値に特定の仮定を設けずに、現状の飲用乳価を前提として推定された各年の K の値をモデル内にパラメータとして導入することが考えられる。これによって時系列的な生乳市場の競争性の変化も考慮された形で現状（制度下）の飲用乳価が内生的に決定される生乳需給モデルが構築でき、現状の制度下において加工原料乳保証価格を引き下げた場合に飲用乳価がどのようなレベルになるかという問題に答え得る。このように、推測的変動の導入は、完全競争均衡モデルの適用が不適当な生乳市場をモデル化する有効な手法と言える。